

私達、頑張れそうかな

青木由美

静岡県・二三・会社員

浜松ー京都間二七〇km。新幹線で約二時間。この距離を近いと思うか遠いと思うか、それが私達の問題でしたね。あなた。

京都での学生時代、私はいつでもあなたと一緒に。お互い用事が済んだら電話して、買物をして、ご飯を食べて……。それなのに同じ時間を共有していることが最高の贅ぜい沢たくだとはつゆ知らず、あれが欲しい、ここへ行きたいと、いつでも私は「お願い」の嵐。人とは違った恋を演出してみたくて、物質面での豊かさを追っていたのかもしれないけれど、その代り足元が全然見えていなかったのね。

地元浜松に戻って就職し、軽い気持ちで遠距離恋愛を始めたけれど、それは間違いだったのかしら？ あなたが側にいないということは、嬉しいことを話す相手がいないということ。悲しい時に泣ける胸がないということ。そして好きと感じた時に、目を見て好きとは言えないこと。それからそれから……。そう、あなたが辛い時に私が

抱きしめてあげられないことも……。ねえ、あなた。私達はお互いが繋つなぐ手と手、触れ合う息と息、そんな単純・繊細なもので支え合っていたのね。まるでそれぞれが投げるさまざまな想いをキャッチボールをするかのように受けとめあう……。でも二七〇kmという距離では、そのボールが時々の外れて遠くへ行ってしまうの。両方の想いがキッチンと届かなくて、投げる前より悲しくなってしまうこともしょつ中よ。負けたくないけど距離に負けそうになるわ。だけどその距離を越えてあなたに逢いに行く時は、少しでも勇気が湧いてくるの。「私達、頑張れそうかな」ってね。私この勇気を貯金していけば、距離という怪物に勝てそうな気がする。離れていてもお互いを強く求め合う心があれば、二七〇kmはどんな短くなることでしょう。

でも、正直言えば毎日一緒にいたい。会って抱きしめてほしい。遠くからでもあなたを想うことはできるけど、今はそれだけが私の唯一の「お願い」です。

*彼が好きという想いばかりが先走って随分とつたない文章になってしまいましたが、何だか自分の気持ちにも少し整理がついたようでスッキリしました。